MYSTERY OF MYSTERIES

生きている義親

南條範夫

講談社

生きている義親

第1刷発行　昭和49年7月24日

著　者　南條範夫
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二一一二一二一
〒一一二　振替　東京　三九三〇
電話　東京（〇三）九四五一一一一一（大代表）
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社国宝社

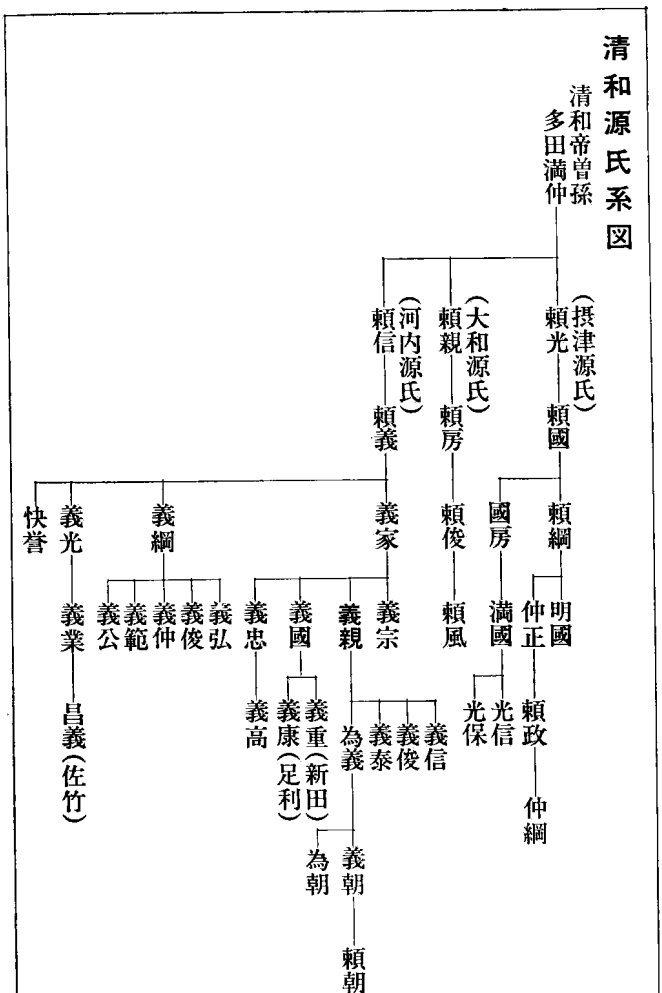
©南條範夫　昭和49年　落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
定価は箱に表示してあります。（文二）

目次

虚像と実像　5
骨肉相喰む　48
第一の死　94
第二、第三の死　136
第四、第五の死　181
生きている義親　229

装幀　岩本正雄
写真　国分正夫

清和源氏系図



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo

生きている義親

大日本史　卷之二百二十八　叛臣四

源義親、鎮守府將軍義家ノ第二子ナリ、左兵衛尉トナリ対馬守ニ任ジ、従五位上ニ叙セラレシガ、康和中、鎮西ヲ横行シテ人民ヲ侵凌シケレバ、朝廷兵ヲ発シテ之ヲ討ツ。明年、義家従士ヲ遣ワシテ之ヲ召シシニ、至ラズシテマタ官使ヲ殺セシカバ、罪ヲ以テ隠岐ニ流シタリ。然ルニ義親流所ニ至ラズ、留リテ出雲ニアリテ目代ヲ殺シ人民ヲ掠メ官物ヲ奪ウ。嘉承二年、朝廷平正盛ヲ以テ追討使トシテ之ヲ討タシム。天仁元年、誅ニ伏シテ首ヲ右獄ニ梟セリ。（中略）義親既ニ誅ニ伏スルノ後、屢〻義親ト偽リ称スルモノアリ、或ハ捕エラレ、或ハ殺サル。

虚像と実像

一

事の起りは、K――社で催した座談会にあった。同社で発行している月刊誌G――の編集部から、

――日本の武士と武士道と云うテーマで座談会をやりたいから出席して頂きたい、

と云う電話での申入れがあった時、片岡寛一郎は一応、断った。本来、座談会と云うものが余り好きではないし、他の出席メンバーの名を聞いてみると、何れも歴史の専門家なので、自分のような素人の出る幕ではないと、感じたからである。だが、編集次長の桜井哲也が、わざわざやってきて、

「専門の学者ばかりではどうしても固い話になり過ぎるから、是非出て下さい」

と執拗に口説いたので、寛一郎は結局、いつものように承諾させられてしまった。

妻のやす子が時々からかって、

「あなたは、桜井さんには弱いのね」

と云う。別にそんなつもりはないのだが、哲也にねばられると大抵の場合は、しぶしぶながらうなずいてしまうのだ。

哲也が始めて寛一郎の家を訪ねてきたのは、もう十何年も前になる。大学を出て入社したばかりの彼を、その頃G——誌の編集長をしていた藤倉がつれてきて、

——今後、先生の担当にしますから。

と、紹介した。

寛一郎は初対面からこの青年に好意を持った。寛一郎は好悪の情が甚しく、それも大抵は第一印象によって決ってしまうのが例である。

哲也の今時の青年には珍らしく折り目の正しい態度と、賛否をひかえ目な言葉ながら明確に表現する性癖とが気に入ったらしい。

「やっぱり、良い家庭に育ってしつけられたからでしょうね。品が良いわ」

やす子がそう云った。哲也の父が桜井順蔵であると知った時である。順蔵は戦前から知名の政治家で、戦争直後一度台閣に列したことがあり、その後も引続き、保守党の首脳部の一人と

して活躍している。政治に関心の少い寛一郎も、老巧な政界人と云う印象だけは持っていた。知名の政治家と云うことだけで「良い家庭」と判断してしまうのは、やす子のいつもの癖である。

哲也は、言語も態度も明るい青年であったが、どうかすると、時に、その横顔にチラッとひどく陰鬱なものが閃く。そんな時、男にしてはやや長すぎる睫毛が、微かに煙るように見え、寛一郎はそこに、失われた自分の青春の翳が漂っているような気のすることがあった。

哲也は十何年も、G——誌の編集員として寛一郎の家に通ってきた。その間に結婚をし、子供を持ち、編集次長になっていたのだ。

恋愛結婚だったらしい。寛一郎も結婚式に招かれ、予めスピーチを求められていたので、その恋愛の過程について二、三の質問をしてみたが、哲也はパッと顔を紅らめ、視線を逸らせて、ひどく照れ臭さそうな顔をした。こんな事件で若い青年をからかうことの好きなやす子も、この時だけはそのまま追求をやめてしまったほどである。

結婚式は、寛一郎が予想していたよりは、ずっとつましやかなものであった。当然予期された政財界人の出席は殆ど全くなく、主として結婚当事者の友人知己関係だけを招いたらしい。この席で寛一郎は始めて、哲也の父親である桜井順蔵に会ったのだが、既に七十歳を超えている筈のその老政治家はまだ矍鑠としていた。

わが子の結婚式だと云うのに、大して嬉しそうな顔もせず、終始、能面のように立派な顔を無表情に硬直させていた。

両家の親族代表として挨拶した時も、どこか不機嫌な、投げやりの、全く形式的なことしか云わない。

——厭な感じの老人だな。

寛一郎は、この知名の老政治家は第一印象から嫌いになった。多くの者が、そうした印象を受けたらしい。

やや白けた感じに陥る可能性のあった披露宴を救ってくれたのは、花嫁が小柄ながら眼の巨きく澄んだ優しい女性だったことと、花婿と花嫁の若い友人たちが、老人の不機嫌さなどは全く無視して明るく振舞ってくれたこととであった。

順蔵に対する本能的な反感とは別に、哲也に対する好感はずっと変らずに継続した。哲也に頼まれて、かなり忙しい原稿も書いたし、時間をやりくりして紀行文執筆の為の旅行もやった。日頃、寛一郎の我儘に呆れているやす子が、

「桜井さんには妙に弱いのねえ」

と、ひやかしたのはそんな事の為である。

ところで、話を始めの座談会に戻そう。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo

赤坂の料亭S――で行われたこの座談会に出席したのは、年輩の歴史学者小泉正澄、井筒公夫と、若手の林誠二郎と片岡寛一郎とである。他にG――誌の編集部から、編集長三好と次長の哲也と、相良と云う青年が来ていた。

討論は始めから、小泉、井筒二人の老学者と若手の林との対立と云う形になった。

小泉、井筒の二人がそれぞれ、武士道の一般的意義を述べ、日本独特の道徳として高く評価し、現代におけるその再評価の必要を述べたのに対して、林はその一切を否定してかかったのである。

「武士道などと云うものを、現代に、どんな形においてでもあれ、復活させようなんて云うのはナンセンスですね。あれは封建体制を維持するために、権力者の側から強要した道徳に過ぎないじゃありませんか。幕末においてさえ、近代的意識に目醒めようとしていた武士の中にそれを否定する空気がはっきり出ている。佐賀藩の大隈重信が、自分たちは佐賀藩士の聖典とされていた『葉隠』に、全面的に反撥していたと云うことをはっきり云っている。福沢諭吉にしたって痛烈な反感と批判を行っている。今更、武士道を復活させようなんて、アナクロニズムも甚しいものですね」

林は、はげしい口調でまくし立てた。

「それは極端な議論だ。大隈や福沢が武士道を批判したのは、封建制批判の余波としてであっ

て、一時的な行過ぎだね。彼らがもし現代に生きていたら、もう一度、武士道を評価し直すのじゃないかな」

小泉が反対すると、井筒もそれに続いた。

「封建道徳だからと云って一概に否定するのはおかしいね、武士道に云う名誉、廉恥、勇気、礼儀、仁愛、至誠、克己、信義の精神などはいつの時代にだって必要なのだ」

「その通りですよ」

林は大きくうなずいたが、出て来た言葉は全くその肯定を逆手に使った鋭いものであった。

「廉恥、勇気、礼儀——今、云われたものはいつの時代でも必要です。同時にそれは日本ばかりでなく、世界のどこの国民にとっても必要なものだ。それも、武士と云う特定の階級のものにとってでなく、凡ての社会生活を行う人間にとって必要なものだ。西洋で云っているジェントルマン・シップの内容だって同じものでしょう。しかし、武士道が日本独特のものとして、封建体制を支える基本道徳として尊重されたのは、あなたが今云われたようなことの外に、忠君と云う観念があったからじゃありませんか。忠君が、武士道と云う日本的倫理の基本なのでしょう。武士道から忠君と云う要素をとってしまえば、単に社会的人間に要求される一般的道徳と云うことになってしまいやしませんか。一般的倫理観念の高揚のために、忠君を基礎として形成されている武士道をもってくると云うのは見当違いですね」

「じゃ、君は武士道と云うものの価値を全面的に否定しようと云うのかね」

小泉は明らかに憤慨していた。

「現代的意味は否定します。それが封建道徳として果した意義は認めますよ。封建時代そのものを、現在の我々がどう批判してみたって歴史的必然として過去に存在したことはどうしようもない事実だし、その封建社会の秩序を維持する為のイデオロギーとして、武士道がそれなりの役割りを果したことは確かでしょう」

「過去において役割りを果した道徳なら、現在でも何らかの役割りは果せる筈だ。たとえば、孝悌とか貞節とか、現在余りにも欠如している倫理観念は――」

と、小泉が云い出すと、林は終りまで待たずにおっかぶせるように、

「孝悌、貞節などと云うのも、忠君から派生したものですね。孝悌――父母に孝を尽し、兄に従うと云うのは、一家の主人である父と母に従い、次代の主人である兄に従うことだし、貞節と云うのは夫婦の間で主人である良人に妻が従うと云うのだから、忠の観念を一家庭と云う小さな世界で再現しているだけのことでしょう。要するにみんな、支配する立場に立つ者にとって最も有利な道徳――縦の道徳ですね。現在改めて倫理基準を唱える必要があるとすれば、それはむしろ横の道徳――社会的責任とか社会的義務とか公徳心とか隣人愛とか云ったものを中心にしたものじゃありませんか」

「じゃ、目上の者に従うと云うことは必要ないのかね。それで社会の秩序が保たれると思いますか」

「責任と義務の観念、社会的礼儀と規律、公徳心と隣人愛とがあれば社会の秩序は充分に保たれると思いますね。何故、先生方は武士道にそんなに執着するのですか。武士道の根幹になっている忠君は、現在、その対象がなくなっているじゃありませんか。まさか、会社員は社長の為に命を棄てて忠節を尽せと考えていられる訳じゃないでしょう。先生たち御自身、誰に忠義をつくすのです」

井筒は唇をわずかに動かしたが、言葉は出てこなかった。恐らくこの時、彼の喉許まで出てきていたのは、

——天皇、

と云う言葉だっただろうが、現代倫理の基本に天皇に対する忠義などと云うことを持出したら、それこそ林にどんな猛爆撃を喰らうか分らないと考えたらしい。

小泉、井筒の二人が、むっとした表情で黙り込んでしまったのを見ると、先刻から少しはらはらした様子で見守っていた三好編集長が、寛一郎の方を向いて云った。

「どうでしょう、武士道と云うものについて、片岡先生のお考えは？」

全く対立する意見を持つ者の間では、説得も諒解も殆ど困難であることを、たびたび見せつ

けられていた寛一郎は、その時まで一言も発しないで討論を聞きながら、些か憂欝になっていた。自分がどう発言しても、議論の打開にも解決にもなりそうにない。

——やっぱり、出てこない方が良かったな、と考え出していたが、発言を促されてみると、何か云わなければならなかった。

「そうですね。武士道が封建秩序維持の為の倫理であり、支配者側にとって極めて便利なイデオロギーだったことは確かだと思いますが、武士道と云うものが、本来そう云うものとして生れ出たものかと云うと、そうではないような気がしますね。つまり、武士道と云う道徳体系は、その発生時代と、その爛熟時代とではかなり違ってきているのではないかと思うのです。その発生時——と云うと、武士階級の勃興期になる訳ですが、その当時の武士道と云うもの——そんな名称はまだなくて、弓矢とる身の習いとか、もののふの道とか云ったんでしょうが、その頃の武士道は必ずしも支配者、つまり主君の側にばかり有利な道徳じゃなかったのじゃないでしょうか。武士の勃興期に当って、日夜、合戦に備え、合戦に従事する、その戦塵の間に、自然発生的に生れ出た慣習——道徳と云うものが、武士道の原型なら、それは一種の戦友愛——ヨーロッパで云う Brother in arms とか Friend in the Trench とか云うものに近いものでしょう。何人かの戦士が集まれば、必らず、その中で軍事智識なり武勇なりに最も優れている者がある。その優れている者が指揮をとって、全員の安全を保障したり勝利を齎らしたり

する。他の者はこの人の云うことを聞いていれば大丈夫勝てるだろう、まさかの時には必らず助けてくれる、と云う信頼感を持つ。信頼された方はそれに応える為に、自から最も危険なことを引受け、全員の為に智力を尽す。時には全体の安全の為には、二、三の者に苛酷な任務を与え、その生命を犠牲にすることがあっても、犠牲になる者は全体の為に甘んじて死んでゆく——こうした関係が定着して、主従となって忠義と云う観念が固定していったと考えられる。つまり、始めの頃の忠は、主君個人に対するよりも、主君によって代表される戦友のグループ、武士の集団に対するものとしての方が意味が強かった。それが次第に、グループのメンバーが増大するに伴って主君個人に対するものに転移していったんでしょう。そうなってもまだ、決して主君の側にだけ有利な片務的な道徳律ではない。鎌倉時代によく云われた御恩と奉公と云う関係ですね。主たる者は部下が危険にさらされていると知れば、自分の危険は顧みずに飛び出して行って助ける。その代り部下も一身をささげて主の為に尽すと云うものだったでしょう。ところが、戦国になると、これが少し変ってくる。弱肉強食——主君がどんなに努力しても、必ずしも部下を守ってやることが出来ない。戦に敗れて全員敗死したり、国を奪われて全員流亡の身となる場合が非常に多くなる。そうなれば、家臣の側の主君に対する信頼は自然に薄らいでくる。こんな主君に仕えていちゃ危いとか、この主君よりおれの方がうまくやれるとか考え出す。そこで主君を変えたり、主君を殺して自分がとって代ると云うことになる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo